憎まれ子世にはばかる

——ハバカル・ハビコル・ハダカルの交渉——

小林賢次

1.

諺にいわく「憎まれ子世にはばかる」と。いろはカルタでおなじみである。普通「人から憎まれるような人にかぎって世間に出てはばをきかす」(『日本国語大辞典』)という意味に理解されている。

この諺がこの形で定着するまでには、さまざまな変容があったようである[注1]。森田誠吾氏の『昔　いろはかるた　全』(求龍堂、1970)によると、古くは、

①にくまれ子世にいづる　やせ子にもかゝる(毛吹草・巻二、34オ、寛永15年＜1638＞)[引用は加藤定彦編『初印本　毛吹草　影印篇』による。]

のような「世にいづる」「国にいづる」などの形で用いられ、のち、「憎まれ子頭固し」などとともに、「世にはばかる」「国にはばかる」、さらに、「世にはびこる」「国にはびこる」など、種々の表現が生じたものである。『日本国語大辞典』や『故事俗信ことわざ大辞典』にもほぼ同様な例が掲出されている。

森田氏は、江戸時代初期の「世にいづる」が、幼時の悪童・餓鬼大将が出世する意であったのに対して、のち太平の世となり体制が固定するにつれて、立身出世ではなく、「憎まれ子」は現実の社会の憎らしい者をさすようになったと説いている[注2]。

なお、いろはカルタでこの諺を収めるのはもともと江戸かるたの方であり、上方かるたでは「に」は「二階から目薬」が普通であったようである。ただし、肥田晧三氏「大阪のいろはかるた」(国文学＜関西大学＞6号、1986・10)によれば、大阪(京都)では「二階から目薬」と「憎まれ子世にはびこる」とが並んで行われ、明治期になって「憎まれ子世にはばかる」の形も現れている。また、森田氏前掲書所引の幸田露伴「東西伊呂波短歌評釈」(明治42年3月『文芸世界』初出)では、

東　にくまれ子は世にはびこる

西　おなじ

とし、その意味について、

舐犢の愛を受けて長ずるものを貶して祖母育ちは三百廉いといへる諺に引かへ、憎まれ子の世に立ちて名を成し群を抜くことを云へる、東西共に同じきもおもしろし(『露伴全集』第40巻、岩波書店、p.176)

と説明している。ここでは「はばかる」ではなく、「はびこる」となっている点が注意される。

2.

ところで、「憎まれ子世にはばかる」の「ハバカル」は、「威張る」とか「幅をきかす」のような意味に用いられていることになる。「ハバカル」がなぜこのような意味を表すのか、問題となるところである。漢字「憚」をあてる通常の用法の場合、「ハバカル」は、「遠慮する」あるいは「さし控える」「つつしむ」の意味であり、名詞形「憚り」や「憚りながら」などの例をまつまでもなく、このような意味が、現代に至るまで基本的なものとして継続していると思われるからである。

浮世草子『好色万金丹』の次の例、

② 憎(にくまれご)子世に憚(はゞ)かるほどの富になるとはいへど、笑ふ門に福来るこそめでたけれ。(巻三・四、日本古典文学大系　p .107)

に関する古典大系本(野間光辰校注)の頭注では、「諺。憎まれ者が却て世間が一目を置くほどの金持ちになるとはいうが、……」としている。これは、「ハバカル」を「遠慮する」の意味のままにとり、「世間の方が憚る」として解釈したものであろう(「憚(はゞ)かる」は底本「はゞかる」。漢字表記は校注者)。考え方としては面白いが、「ハバカル」の動作主を世間の者とするのはいささか無理であろう。やはり「憎まれ子」が「ハバカル」のだと解釈せざるをえない。といって、憎まれっ子が世間に遠慮して小さくなっているのでは勿論なく、逆に世間でのさばっているというところが問題である。

それでは、諸辞典ではこの「ハバカル」をどのように扱っているであろうか。『大言海』では遠慮の意味の「ハバカル」を[沮(ハバ)むノ自動カ]とし、これとは別見出しを立てて、

[はびこるノ転ト云フ、或ハ幅ノ活用カ、幅アル物ノ狭キ間ニ入リガタキ意ニ起ル](一)満チ余ル。ヒロゴル。ハダカル。(用例略)

(二)進ミアヘズ。行キ悩ム。

としている。『新潮国語辞典』でも同様の扱いである。「ハビコル」の転とする説は『和訓栞』に「一間にはばかるなといふハはひこるの転也」とあり、「幅」の活用とする説は『俚言集覧』に見えるが、このような語源説には従いがたい。『俚言集覧』に指摘するように、幅がひろがる、威張るという意味の「ハバル」という語が近世に見え(『日本国語大辞典』には『川柳評万句合』及び『歌舞伎年代記』の例を挙げる。「口はばったい」というときの「ハバッタイ」はその残存である)、これはまさに「幅」

を動詞化したものであろう。また、「幅をする」「幅にする」のような言い方もあり、同様な意味を表している。しかし、「ハバカル」をこれらと同一視することはできないであろう。

最近の辞典類では、「ハバカル」を一語として扱い、自動詞用法と他動詞用法に分けていることが多い。『日本国語大辞典』では、自動詞として、

(1) 幅があって、狭い所にはいりかねる。転じて、差し障りがあってうまく進まない。行き悩む。(用例略)

(2) 幅が広がる。いっぱいになる。満ちふさがる。はびこる。(用例略)

(3) 威張る。幅をきかせる。「憎まれっ子世にはばかる」＊古文真宝後集抄・一「天下にはばかるほどの欲をするものを戒るぞ」＊浄瑠璃・心中天の網島・上「身振斗は男をみがく町一杯に、はばかってこそ帰りけれ」

という三つのブランチを立てている。「幅」と関連づけた説明をしているのは、語源的な共通性を考えているのだろうか。(1)は上代から見られるもの。(3)と関連して問題となるのは(2)の意味の用法である。

『岩波古語辞典』では自動詞と他動詞の区別を立てず、≪ハバメ（阻）と同根。相手の力や大きさに直面して、それを恐れ、あるいはそれを障害と意識して、相手との間に距離を置くのが原義≫としている。その(3)(4)に、

(3) 周囲にさしさわりとなる程一杯にふさがる。大きくのさばる。(用例略)

(4) はびこる。幅をきかす。「雲孫（つるのこ）玄孫（やしはご）まで栄え繁昌して、……ひとり子国に―・るとは此事をこそ申しけれ」(伽・弥兵衛鼠)

として、「ひとり子国にはばかる」の例を挙げている。「ひとりっ子」は甘やかされて育つため「憎まれ子」となることが多いというところから言ったものらしく、とすれば「憎まれ子……」と同様なものである(注3)。各ブランチの意味の説明は『日本国語大辞典』と大差なく、その他『古語大辞典』(小学館)、『広辞苑　第三版』などでも大きな相違はない。

3.

それでは、「ハバカル」及びこれに関連する「ハビコル」の用例について、具体的に見てみよう。

「ハバカル」は、『日本書紀』の歌謡における、

③ 赤駒の　い行き波々箇屡（ハバカル）真葛原　何の伝言　直にし良けむ（書紀歌謡・天智15年。『万葉集』巻十二・3069にも同一歌）

の例を始めとして、「行き悩む」あるいは「遠慮する」の意味としては、上代以来広く用いられている。『源氏物語』の場合を見ると、「思ひはばかる」や「はばかりおづ（怖）」など複合動詞の例を含めて、動詞例「ハバカル」は99例を数えるが(注4)、いずれも「遠慮する・つつしむ」の意味に用いたものとみてよいようである。

④ としごろ世にはゝかりて、出で入りもかたく見たてまつり給はぬ嘆きを（源氏・澪標、『源氏物語大成』一p.498-8）

のような場合、「世にはばかる」は勿論「世間にはばかる」のであるが（この場合藤壺が弘徽殿方に遠慮している）、「憎まれ子世にはばかる」の場合と同一の形態をとっていることが注意される。

『観智院本類聚名義抄』では「憚」の訓に「ハヾ（上上濁）カル」（法中七七）、「難」の訓に「ハヾカル（上上濁上平）」（僧中三六）とあるほか、「諫」「怯」「虞」などの訓として「ハゝカル」が用いられている。また、『色葉字類抄』には「憚ハゝカル」（前田本・上30ウ、辞字）の項に「諫」「悛」「怯」「難」「沮」などを掲出している。「所難　ハゝカラル」（前田本・上34オ、畳字）の例もある。これらの漢字も「遠慮する」「つつしむ」などの意味を表すものと言えるであろう。

「ハバカル」を『日本国語大辞典』の(2)の意味、すなわち、いっぱいに満ちふさがるという意味に用いたものとしては、『言海』(注5)、『大日本国語辞典』などに掲出されている『散木奇歌集』（源俊頼<1055～1129>）の次の例が初出のようである。

⑤ みだ（弥陀）の身も天のみそらにはゝかりてよもせばしとや思ひしるらん（釈教）（『私歌集大成・中古２』書陵部蔵本）

詞書に「阿弥陀仏の御身は世のなかにみちてはかりうべからず、といへる事をよめる」とあって、「みそらにはゝかりて」が「空に満ちて」の意味であることが明瞭に示されている(注6)。

『覚一本平家物語』には、この意味の「ハバカル」が２例ある。

⑥ 或夜入道のふし給へるところに、ひと間にはゞかる程の面いできて、のぞきたてまつる。（巻五・物怪之沙汰、古典大系本p.341）

⑦ かくしておほくのどくろ（髑髏）どもがひとつにかたまりあひ、つぼ（坪）のうちにはゞかる程にな（ッ）て（同、p.342）

『平家物語総索引』（金田一春彦他編）によると、『覚一本平家物語』において「ハバカル」は29例あり、例⑥⑦以外は、

⑧ 「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはゞかり給べきに、おさなき者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。」（巻一・殿下乗合、p.118）

のように、「遠慮する」という一般的な意味に用いたものである。この場合には「～ヲハバカル」「～ニハバカル」の両用法が見られるが、「満ちふさがる」の意味の場合には、常に「～ニハバカル」の形で用いるのが特徴である。たしかに自動詞の用法と言えるであろう。

室町時代におけるこのような「ハバカル」の例として、大塚光信氏は『蔭涼軒日録』『天稚彦草子』『本福寺跡書』『日本書紀桃源抄』などの例を掲出している(注7)。当時、この意味にもかなり広く用いられていたことが知られる。

次に「ハビコル」は、草木などが生え広がる、繁茂するという意味に用いることが多いが、草木など以外の一般の場合にも、「勢力が広がる」「繁栄する」の意味で用いられている。≪ハビコリの母音交替形≫（『岩波古語辞典』）という「ホビコル」も、

⑨ この見ゆる雲保妣許里弖（ホビコリテ）との曇り雨も降らぬか心洗ひに（万葉・十八・4123）

と、雲が広がる意味に用いられている。これは草木が茂る意味からの比喩的用法とも考えられるが、むしろ、もともと草木などの場合のみに限定されるものではなかったと考えた方がよいであろう。

『類聚名義抄』では「遁」「莚」「蔓莚」「迸」「滔」などの訓として「ハビコル」が見え、「蔓」には「ハヒコル（平平濁上平)」「ホヒコル」（僧上一三）の両訓がある。また『色葉字類抄』には「蔓莚」（前田本、上34オ）及び「蔓」の異体字に「ハヒコル」の訓を付し（同、上30ウ、辞字)、「滔　一水」をも掲出している。「蔓」の類は草木に関するものであるが、「滔」は水が勢いよく流れるさまをいうものであり、草木の繁茂以外の用法を示すものである。このような例を二、三示そう。

⑩ 天ニ滔レル巨海驚浪ヲ侵シテ〔而〕羈遊シ［滔天巨海侵驚浪而羈遊］（大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点・八、387行。築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究・訳文篇』）

⑪ 件の大蛇は尾かしらともに八あり。をの〳〵［八みね］八の谷にはいはびこれり。（覚一本平家・十一・剣、p.346）

⑫ 少シノ悪ヲコラサネバ、大キナ悪ガ世ニハビコル（fabicoru）トイウコトヲ知レ（天草本伊曽保・母と子の事、p.476）

ところで、「ハビコル」には、このような意味のほかに、先の「ハバカル」と同様、「物が満ちて一杯になる。充満する。」（『日本国語大辞典』）の意味のものがある。

⑬ 谿谷（に）霢一湯す。（大唐西域記長寛元年点・四、189行。中田祝夫『古点本の国語学的研究・訳文篇』。『岩波古語辞典』所引）

⑭ 雨遂に滂（ハヒコリ）沱（み）ちぬ（金剛般若経集験記平安初期点。『日本国語大辞典』『古語大辞典』所引）

森田武氏は、バレトの『天草版平家物語難語句解』に caber（容器などの中にはいり得る）と注し、「コノ荷ハコノ所ニハビコル（fabicoru）」の例を添えていることに関して、「ハバカル」と「ハビコル」の諸例を検討し、ある範囲内に一杯に満ちふさがる意味で「ハバカル」と「ハビコル」とが同じように用いられていることを明らかにしている(注8)。難語句解の注釈に対応する『天草本平家物語』の本文は、

⑮ 平家ワ讃岐ノ屋島ニイラレタレドモ、ソット歩ヲシナヲイテ　アソコココ十四ガ国ホドキリ従エテハビコラルル(fabicoraruru)トコロデ、（巻Ⅲ・12、p.209）

とあり、この「ハコビル」は、勢力が盛んになるという通常の意味である。これに対するバレトの注記は、たしかに『日葡辞書』の「ハバカル」の記述と共通する。『日葡辞書』の「Fabacari, ru, atta.」の項には、「気おくれし、畏敬する」という通常の意味を示すとともに、「コノイレ物ニワ経ガハバカッテ（fabacatte）入ラヌ」の例を挙げて「中に物が入りきる、おさまる」（『邦訳日葡辞書』）という意味を示し、また、「天下ニハバカル（fabacaru）ホドノトガヂャ」という、前述の諸例と共通の例を挙げているのである。

この「天下にはばかる」「天下にはびこる」のような例は、虎明本狂言に、次の共存例がある。森田武氏前掲書に所掲のものであるが、あらためて取り上げ、他の狂言台本の様相とも比較してみよう。

⑯ （浄土僧）／げにそれハきひたやうに有よ　（法華僧）／きかいでかなふまひ、日本にはびこる程のほうもんじや程に……（法華）／あふそときひたやうなよ　（浄土）／きひたハ道理、たうど天竺我朝、三国にはゞかるほどのほうもんじやよ（虎明本・宗論、『大蔵家伝之書　古本能狂言』二　p.675、678）［頭部書入れに「憚(ハヾカリ)　万葉ニ、泮(ハビコル)、蔓(同)、溥(同)」とある。虎明とは別筆か。］

⑰ （都）／さてそなたもかうやく（膏薬）のけいづがあるか　（鎌倉）／おんでもなひ事、東国にはゞかる程のいげんが有　（都）／身共がけいづハ天下にはびこるほどなけいづじや（同・膏薬煉、三　p.144）［頭部書入れに「／天下に弥満、ハビコリ、ミツル、草ノ葉ノ蔓ハビコル」とある。］

例⑯は、最初に法華僧が「日本にはびこる」と言ったのに対して、浄土僧は「三国にはゞかる」と、一段とオーバーな表現で言い返したものである。また例⑰では、鎌倉の膏薬煉が「東国にはゞかる」と言ったのに対して、都の膏薬煉は、「天下にはびこる」と、やはりより大きな範囲で言い返している。この場合、「日本」と「三国」、

「東国」と「天下」という対照が問題なのであって、例⑯と⑰では「ハバカル」と「ハビコル」の出現順は逆になっている。両形式が同義語的なものとして用いられていることを物語るものであろう。

他の狂言台本について見ると、例⑯の「宗論」の場合、「日本に……」と「三国に……」との対照はほぼ諸本に共通しているのであるが、「ハバカル」「ハビコル」に相当する箇所は諸本により異なっている。大蔵流の虎寛本や山本東本（古典大系）では、両方の箇所とも「ハビコル」に統一している。和泉流では、天理本・和泉家古本にはこのような表現を欠いており、『古典文庫本』では、最初の法華僧のせりふが「日本無雙の法文ぢや」とあるのに対して、浄土僧のせりふでは「三国にはびこつた」となっている。『狂言集成本』『三百番集本』の翻刻では、表記が異なるが、それぞれ「はびこる」及び「蔓る」で統一している。また、鷺流の場合は、保教本では「日本ニハヾカル」「三国ニハヾカル」と、「ハバカル」に統一しているのに対して、賢通本（朝日古典全書）では「ハビコル」の方に統一している。なお『狂言記正篇』では法華僧のせりふにのみ「三国にはゞかる」の例が見られる。以上、全体的に見ると、台本定着期のものにおいては比較的「ハバカル」を用いる傾向が強いのに対して、後世の固定期の台本においては「ハビコル」に統一するという傾向がうかがえるのである（注9）。

例⑰の「膏薬煉」の場合は、「東国にはゞかる」と「天下にはびこる」の形で「宗論」と同様の応答をしているのは、管見の限りでは虎明本だけである。虎寛本になると、鎌倉の膏薬煉のせりふとして、

⑱ （アド）中〳〵、関東にはびこる程の異験が有る。（虎寛本・膏薬煉、岩波文庫本・下 p .232）

とあるのみで、都の膏薬煉のせりふでは、「さりながら、夫ほどの事はこちにも有る。」となっている。和泉流の天理本・和泉家古本・三百番集本、鷺流の保教本・賢通本、また『続狂言記』等では、鎌倉の膏薬煉・都の膏薬煉のどちらのせりふにもこうした表現はとられていない。以上のように、諸本による異同がかなり大きく、「ハバカル」と「ハビコル」とを、ある範囲の中でいっぱいに満ちふさがるという、ほぼ共通の意味のものとして共用しているのは、虎明本の一つの特色だと言えるようである。虎明本では、中世的な意味・用法を伝承した「ハバカル」と、意味の理解の容易な「ハビコル」とを意図的に対照させているのかもしれない。

なお、次の例はやはり例⑯⑰と共通のものである。

⑲ ／おほぞらに、はゞかるほどの餅もがな、いけらふいちごかぶりくらハむ（虎明本・餅酒、一 p .43）

この歌はすでに天正本に次のように見えている。

○　大空にはゝかる程のもちいかないきたる一世かふりくらわん（天正本・餅酒、『狂言古本二種』わんや書店）

本文が一部相違しており、天理本・保教本以下、後世のものは大体虎明本の本文と共通である。いずれにしても、「大空にはばかる」とする点には変わりなく、空いっぱいに広がるという意味を表している。ただし、『狂言記拾遺』においては、

⑳　▲シテ大空にはびこる程の餅もかないけるをいちごかぶりくらはん（四３ウ）と、

「ハビコル」になっている点が注意される。版本狂言記の諸本が正統的な流派における伝承と相違している一面を示すものである。

ところで、以上のような「ハバカル」と「ハビコル」との近接した関係はどのようにして生じたのであろうか。森田武氏は、前掲書において、ある範囲に満ちふさがるという意味の「ハビコル」に関して、＜古く訓点資料などに例のある「ひろがる、充満する」の意味が残ったものか＞、あるいは＜「ハバカル」との語形と意味の類似から、両者間に意味の干渉が起こったのか＞、そのいずれであるかは論証困難として慎重に結論を保留している。あえてこの問題を考えてみると、森田氏の二つの観点は二者択一のものではなく、相互に関連しているものと思われる。

すなわち、先に見た「空にはばかる」などの場合、「ハバカル」は、いっぱいになってつかえ、それ以上はいりきらないという、もともと否定的なニュアンスを伴うものであったと思われる。これに対して「ハビコル」の方は、勢力をどんどん広げ、それがある範囲内でいっぱいになるという状態を意味しているのであろう。「天下にはびこる」などは、天下に満ち溢れるのであって、否定的なニュアンスは伴っていない。このような「ハバカル」「ハビコル」は、それぞれその本来の意味・用法からの転用であったと解釈される。ただし、結果的には「～ニハバカル」「～ニハビコル」は、きわめて近い意味を表すこととなり、語形の類似ということもあって、両者は混同される場合も生じたのであろう。

4.

さて、以上見てきたように、「ハバカル」と「ハビコル」とは室町時代から江戸時代にかけて、共通の意味・用法を有するものであった。しかし、ここで「憎まれ子世にはばかる」に立ち帰って考えてみると、この「ハバカル」は、前述の『日本国語大辞典』のブランチ(3)のように、「威張りちらす」とか「幅をきかす」あるいは「のさばる」のような意味である。「ハバカル」のこのような意味は、単に「ハビコル」に

影響されて生じたものなのであろうか。「ハビコル」の意味そのものとはややズレがあるのではないかと思われるのである。

ここで想起されるのは、「ハバカル」に語形がきわめて近い「ハダカル」の存在である。「ハダカル」は『大言海』や『大日本国語辞典』で「ハバカル」の語釈中に言い換え語として用いており、特に注意されるのは、『譬喩尽』（松葉軒東井編、天明7年＜1787＞）に、次の例があることである。

㉑ 憎まれ子国に扈る（宗政五十緒編『たとへづくし―譬喩尽』同朋社 p. 66）

前掲、森田誠吾氏『昔　いろはかるた　全』などによると、この類の諺に「ハダカル」を用いているのは例㉑のみで、他には見られないようである。したがって、この形で一般に通用していたのかどうかは不明であり、あるいは編者東井が語源考証的な意識で「扈る」を用いたのかもしれない。それはまたそれで、「憎まれ子国に（世に）はばかる」の「ハバカル」は正しくは「ハダカル」であるという解釈が提出されていることになる。注目すべき見解である。

「ハダカル」（「ハタカル」と第二音節は清音にも。後述）は、広がり開く意味であり、諸辞典に掲出されているように、目や口が開く、すなわち、驚いたりして目を見開き、口をぽかんとあける形容の例が、古く『落窪物語』（巻三）、『今昔物語集』（巻十九・十八）などにある。

㉒ シテ／太郎くわしや、目口はたけ、とつてくわふと云て、つまる也（天理本狂言六義・抜殻、『天理善本叢書』上　189オ）

は、その他動詞形である。『類聚名義抄』では「抜」「跨」「騎」の訓に「ハタカル」とあり、また、『色葉字類抄』には「扈　ハタカル」「跋扈　フミハタカル　誇張分」（前田本）、「跋扈　フムハタカル」（黒川本）とある。「踏みはだかる」や、現在普通に用いられる「立ちはだかる」はまさにこの「ハダカル」を構成要素としたものであり、

㉓ 牛ノ踏ハダカリテ不動デ立テリケレバ（今昔・巻二七・二六、古典大系（四）p .514）

㉔ 抜扈将軍トユワレタ。コレハフミハタカルチヤカ。コヽハ只人ヲシノク体ソ。ミタリニ人ヲシノクコトヲナセラレ候ソ也。（両足院本毛詩抄・十六24ウ。古活字本、十六31オ）

㉕ くろやなぎ孫左衛門尉か立はだかりててつほうにて（豆吉を）打者をはなしてのきければ（三河物語・三、『原本三河物語・影印篇』勉誠社、p .313）

など、足を大きく広げて立つ様子を表す。『日本国語大辞典』には、そこから転じた

ものとして、「ハダカル」に「いばる。大きな態度をとる。」のブランチを立てている（用例、川柳評万句合・宝暦一〇・桜二「松の内心置きなくはたかられ」)。例㉔もその意味に解釈される。これは「憎まれ子……」の「ハバカル」の意味にぴったりと重なってくる。

山田俊雄氏は、『熱田本平家物語』において用いられている一漢字（「面」を篇とし、「半」をつくりとする合字）について、「ハタカクル」にあてる「半面」の熟字を利用した「ハタカル」の表記であることを論証し、「ハタカル」の第二音節が清音「タ」であったことを示すものと述べている(注10)。

たしかに、『日葡辞書』には「Fatacari, ru, atta.」「Fumbatacari, ru, atta.」とあり、清音の伝承を物語る。しかしまた、山田氏も指摘しているように、『運歩色葉集』に「扈(ハダカル)」「跋(ハダカル)　踏ー馬」「開(ハダクル)　ー口」（静嘉堂文庫本）と、第二音節を濁音で表記した例もあり、中世の頃には、「ハタカル」「ハダカル」、「ハタクル」「ハダクル」と、清濁両形が用いられていたと考えていいようである(注11)。『三河物語』の例㉕の場合「立はだかる」と濁音で表記されている。近世において、次第に濁音形「ハダカル」の方が一般的なものとなってきたのであろう。『日本国語大辞典』における「はだかる」の［方言］項目によれば、東北・関東・中部・四国・九州と、各地の方言集にこの語が立項されていることが知られるが、清濁に関しては「はだかる」「はたかる」両形式が共存している。なお、ヘボン『和英語林集成』（初版）では、「HATAKARI, -ru, -tta,」を空見出しとし、濁音形「HADAKARI, -ru, -tta,」の項で「Hadakari-tatsz, to stand with the legs wide apart.」の意味を記している（第二版では「Hadakari ni tatsu」と「ニ」がはいっている）。

「ハタ（ダ）カル」に対する他動詞形「ハタ（ダ）クル」の場合は、

㉖　刀ナントヲハ不用シテ大ノ手ヲハタケテ猛獣ヲトラヘテヒツサキ〵〳〵スルソ（京大清家文庫蔵史記抄・二３オ、寛永古活字版三６ウ）

㉗　寝不尸　ヌル時ニ手足ヲフミハタケテハ不可寝（東山御文庫蔵応永二十七年本論語抄・郷党、三32オ）

などのように、本来、目・手・足などを広げるという、まったく「ハタ（ダ）カル」に対応するものであった。現代語の「ハダケル」の場合、「着物の前、胸、裾」などが開くというきわめて限定された意味・用法となっている。ただし、「着物ガ（ヲ）はだける」のように、自動詞・他動詞の両用法を有するものとなっている点が注意される。これは、本来の自動詞形「ハダカル」が衰退し、意味的な相違も生じているため、「ハダケル」と対立することがなくなったことに支えられた現象だと言えるであ

ろう。

以上、「ハタ（ダ）カル」の意味と使用状況を見てきた。「ハバカル」の意味の変容、特に「憎まれ子世にはばかる」における「威張る・のさばる」の意味の成立には、「ハビコル」よりも、むしろ語形のより近い「ハタ（ダ）カル」が大きく関与していたものと推定される。大きく立ちはだかり、威張りちらすという「ハタ（ダ）カル」が、いっぱいに満ちふさがるという「ハバカル」にいわば吸収されたのが「憎まれ子世にはばかる」なのであろう。「ハバカル」を、「幅」を活用させて「幅をきかす」の意味となったと解するのは、民間語源説の域を出ないであろうが、ただ、「ハバ～」という語形の故に、「ハバカル」自体にそうした解釈を許す余地があり、それは、「ハバカル」のこのような意味・用法を保障する一要素となっていたものと思われる。

冒頭に紹介した、「世に（国に）いづる」から「世に（国に）はばかる」への推移には社会的な体制の変化が反映されているという森田誠吾氏の指摘は興味深いが、言語史的な観点から考えると、またさまざまな問題点が浮かんでくるのである。

(注)

1. 現代では「憎まれっ子」の方が普通であろう。近世までの文献では、促音を表記した例がないので、「憎まれ子」の形で示す。
2. 前掲書及び森田誠吾『いろはかるた噺』（求龍堂、1974）
3. 『三河物語』に次の例がある。
   ○ 我も国にはゞかる程の独（ヒトリ）子をもちて、殊夫、我あとをつがせんと思ひて有に（三、p.273、森田武（注8）所掲書所引）
   この例を見ると、大切に育てているひとりっ子という意味であり、「国にはゞかる」は、立身出世し、威勢をふるうことをさしている。
4. 『源氏物語大成・索引篇』（中央公論社）による。木之下正雄『源氏物語用語索引』（国書刊行会）、吉沢義則『対校源氏物語新釈』（平凡社）では97例と、用例数に多少相違がある。
5. 出典表示なし。『大言海』ではこの例は削られ、代りに前掲の(一)の用例として、『盛衰記』『狂言記』（宗論）『俊秘抄』の例が掲出されている。
6. 関根慶子『散木奇歌集の研究と校本』（明治図書、1952）によれば、諸伝本中、「あまの（天の）」を「あまつ」、「よも（世も）」を「よは」とする写本があるが、「はゞかる」に関しては諸本に異同は存しない。
7. 大塚光信『キリシタン版　エソポのハブラス私注』（臨川書店、1983。補注「憚る」

p .107)

8．森田武『天草版平家物語難語句解の研究』(清文堂出版、1976。p .417～419)

9．山口に伝わる鷺流狂言台本「宗論」(村谷本) では、「日本にはばかる」、「三国にはゞかる」の形で「ハバカル」を用いている(『鷺流狂言』山口市教育委員会、1981)。古い伝承が残存しているものと思われる。

10. 山田俊雄「漢字によって語を表記する工夫の一例 ー熱田本平家物語の「はたかる」の場合ー」(成城文芸・77号、1976)

11.『蒙求抄』の次の例、

○ 文選ニ跋扈トフンハタカルトヨムソ (古活字版 一20オ)

○ 跋扈ハ強梁シテコハイナリソ 又ハフミハタカルソ 緩怠ナヽリソ (同・一39ウ)

は、文選読みの伝承からは「フンバタカル」のように読むようであるが (山田氏<注10>論文参照)、寛永十五年版本では「フンハダカル」(一20オ)「フミハダカル」(一39ウ) と、「ハダカル」になっていて注目される。

(こばやし けんじ・東京都立大学助教授)